

CHUKYO UNIVERSITY

誌面リニューアル!!

SPORTS

Vol. 18
2018/5月号

学術とスポーツの真剣味の殿堂たれ

中京大学スポーツ

PICK UP!!

日本選手権水泳競技大会での活躍
日本陸上競技選手権大会に向けて

PyeongChang REPORT

平昌五輪結果、
そして次へ

NEWS FLASH

プロボクシング 田中恒成 復帰戦飾る

2020年 東京を目指して

寺本明日香(体操)・大庭雅(フィギュアスケート) 卒業

期待の新生

吉永一貴(ショートトラック)・山本草太(フィギュアスケート)

須崎海羽(フィギュアスケート)

先輩NOW / 平井一正さん(ウエイトリフティング)

挑戦する大学

 中京大学
CHUKYO UNIVERSITY



1位でゴールし、ガッツポーズをする小西選手



Swimming

日本選手権水泳競技大会での活躍

新年度の始まりとともに幕を開ける恒例の競泳日本選手権大会が4月3～8日、東京辰巳国際水泳場で開かれた

第94回を迎えた今大会は、第18回アジア大会（8月18日～9月2日）、インドネシアジャカルタと第13回パンパシフィック選手権東京大会（8月9～12日）の選考会を兼ねており、スポーツ科学部4年の小西杏奈選手が大会第3日の女子100メートル背泳ぎで派遣標準記録（1分0秒08）を上回って優勝し、両大会への出場を決めた。また、水泳部の草薙健太コーチも代表選手団のコーチとして参加する。

中京大学勢はこのほか、小西選手が初日に50メートル背泳ぎでも3位入賞したのをはじめ、第3日にリオ五輪男子背泳ぎ100メートル代表の長谷川純矢選手（2015年度スポーツ科学部卒、ミキハウス）が50メートル背泳ぎで、最終日には男子800メートル自由形の谷健友選手（スポーツ科学部4年）と女子50メートルバタフライの相馬あい選手（スポーツ科学部3年）がともに3位に入り、表彰台に上った。4～8位の選手を合わせると、17種目に延べ24選手が入賞した。

◇ 100メートル背泳ぎ優勝の小西選手は予選を自己ベストの1分0秒00、準決勝1分0秒04と、ともにトップ通過。決勝は堂々の第4レーンを泳ぎ、後半の追い込みで2連覇を達成した。記録は自身初めて1

分を切る59秒62。昨年は優勝しながら世界選手権への派遣標準記録を突破できなかっただけに、「去年の悔しさをバネにすることができた。目標にできたタイムを上回れて嬉しい」と笑顔を見せた。アジア大会については「まだ世界で戦えるタイムではないのでもっと頑張らなくてはと思っています。日本代表としてメダルを狙いたい」と気合を込めた。

大会最終日の女子50メートルバタフライで相馬選手は好スタートから積極的な泳ぎで、表彰台に上った。男子100メートル自由形の難波暉選手（スポーツ科学部4年）は49秒37の自己ベストをマークした。結果は7位に終わったが、積極的なレースをしたことで、「最後まで出

力高く泳げるようにしたい」と今後につなげた。また、出場した3レースすべてに高いパフォーマンスを見せたのが、自由形長距離の谷選手。成績はまずまずの400メートル4位、800メートル3位、1500メートル5位だったが、400メートルでは予選を1位通過、最終日の800メートル決勝では前半をトップで引張るなど、常に積極的なレース運びで持てる力を十分に発揮した。

（心理学研究科修士2年 小林由佳、国際教養学部3年 吉永翠、心理学部2年 福西加純）

* PICK UP!! *



中村選手(十種競技)=日本GP大会(4月20日・駒沢)



中山選手(三段跳び)



左から瀬古選手、水谷選手、蛭子屋選手(走り高跳び)



市川選手(女子短距離)



石山選手(やり投げ)



瀬古選手(走り高跳び)

Track and field

日本陸上競技選手権大会に向けて

6月に開催される陸上競技の日本選手権大会に、多くの現役生、卒業生が出場予定
東京五輪に向けて活躍が期待される

陸上競技の第102回日本選手権は6月22〜24日に、山口市の維新みらいふスタジアムで行われる。8月にインドネシア・ジャカルタで開かれるアジア大会の日本代表選考を兼ねており、2年後の東京五輪を視野に入れると、(陸上競技の中京)にとって重要な大会となる。現役生では、昨年に続いて男子走り高跳びにトリオが出場する。スポーツ科学部4年の主将を務める水谷来と蛭子屋雄二両選手、同3年の瀬古優斗選手で、参加標準記録を突破するなど厳しい参加資格のある大会で3人出場は誇れる。昨年は水谷、蛭子屋両選手が2位10で8位入賞。試技数で入賞を逃した瀬古選手も2位10をクリアした。3人は「当然、記録も順位もさらに上を目指します」と練習に打ち込んでいる。

男子やり投げの石山歩選手(スポーツ科学部4年)も期待の一人。昨年の西日本インカレで77位91を投げ、注目度が高まった。「しっかりと80位を超えたい」と上位入賞を狙う。

昨年のインカレで三段跳び16位19を跳び2位となった中山昂平選手(体育学研究科2年)は、「さらなる記録更新を目指す」と力強く語った。

卒業生では、男子の400m障害、棒高跳び、円盤投げ、十種

競技、女子の短距離で優勝争いに期待がかかる。

400m障害の安部孝駿選手(2013年度体育学部卒、デサントTC)は2連覇に期待がかかる。

棒高跳びはロンドン、リオ五輪代表の山本聖途選手(2013年度体育学部卒、トヨタ自動車)と、インカレ2連覇を成し遂げ、今春、スポーツ科学部を卒業した鈴木康太選手、円盤投げの湯上剛輝選手(2015年度スポーツ科学部卒、トヨタ自動車)らが日本記録を狙えるレベルに達している。

十種競技は日本選手権2連覇中の中村明彦選手(2012年度体育学部卒、スズキ浜松AC)。今季初戦の日本GP東京大会(4月22日・駒沢)は平凡な記録で2位に甘んじたが、「日本選手権では」と挽回を期す。女子短距離の市川華菜選手(2012年度体育学部卒、ミス)は昨年に続く100m、200mの2冠に挑戦する。このほかにも多くの有力選手が出場予定である。





平昌五輪
悔しい思い、次の目標へ
モーグル

堀島 行真

Ikuma HORISHIMA



平昌五輪に出場したフリースタイルスキー・男子モーグルの堀島行真選手は五輪を終えて、「思うような結果にならず、自分自身悔しい思いをしました。帰国したとき、これまでかわつてく、ださった方々も悔しい思いをしていたことを実感して、さらに悔しい気持ちになりました。また、メダルを取ることの意味の大きさを知ることになりました」と語った。

平昌五輪での堀島選手は、決勝に進み1本目は順調な滑りを見せていたが、2本目のファイナル進出を目指す滑りで転倒、11位となり、惜しくも入賞を逃した。しかし、その後の3月4日に行われたワールドカップ（W杯）秋田たざわ湖大会では優勝を果たし、今季W杯通算3勝目を挙げている。

2017/18シーズンのモーグルW杯10戦のうち7勝がキングスベリ―選手、3勝が堀島選手という結果となった。

また、3月17日に行われた全日本スキー選手権大会でも2種目制覇し、五輪後に出場した大会は全て優勝している。

「五輪まではけがをしてはいけないうなど、意識することが多く、終わってから、いろんなことにチャレンジできるようになりました。そのため少し余裕ができました。常に成長できるように練習していれば自然と相手を引き離していけると考えているので、新しいことにチャレンジすることができました。それが結果につながったと思います」

五輪後、結果を出したことで言葉のひとつひとつに自信がうかがえた。

「今後はジャンプの回転数などレベルが上がっていくと思うので、自分が先陣を切っていけるような状態で大会に臨みたいと思っています。勝つことだけを考えてしまうと、挑戦できなくなってしまうので、挑戦していく中で試合には勝つ気持ちで、試合以外の部分は自分の成長につなげていきたいと思っています」と表情を引き締めた。また、「絶対王者と呼ばれるに値するキングスベリ―（カナダ）がいる中で、年間総合3位という成績を残すことができたのは成長している証だと思うので、来年は、キングスベリ―と対等に戦えるように成長したい」と決意を語った。

W杯、北京五輪に向けてのさらなる挑戦が始まる。



平昌五輪 力出し切り満足感 フィギュアスケート

宇野 昌磨

Shoma UNO

フィギュアスケートの宇野昌磨選手が3月6日、名古屋キャンパスを訪れ、梅村清英総長・理事長、安村仁志学長に平昌五輪の結果を報告した。

宇野選手は2月14日に行われたシヨートプログラム（SP）で3位につけると、17日のフリースケーティング（FS）ではSP2位の選手を逆転し、銀メダルを獲得した。

宇野選手は「満足しています。最初のジャンプは失敗してしまいましたが、失敗した後の声援がとても温かくて、力が湧いてきました」と声援に感謝した。

現地で声援を送った梅村総長・理事長は「まずは本当におめでと

うございます。あの雰囲気のもとでよく力を発揮されたと思います。

自然体で臨むことができたということとは非常に大きな収穫だったのではないのでしょうか」と称えた。安村学

長は17日、豊田市で行われたパブリックビューイングで応援した。「日本全国に多くの大学がある中で、応援ができるということと自体、その場にいられるということがすごいことだと感じます。良い経験をさせていただきました」と感謝した。

宇野選手は「大きい小さいにかかわらず、どの試合も100%の力を出すことには変わりありません。それがあの場でもできたのではないかと思います」と振り返った。また、

金メダルに輝いた羽生選手について「あれだけのプレッシャーを背負った中であれだけの演技ができるのは本当にすごい。いつか同じプレッシャーを背負って戦える選手になれたらと思います」と語った。

また、4月3日、名古屋市の名古屋観光ホテルで開かれた、所属先であるトヨタ自動車と中京大学への報告会の後、同ホテルで記者会見に臨んだ。

平昌五輪終了後の世界選手権（3月）でも銀メダルを獲得した宇野選手は「結果だけ見ればいいシーズンだったがすべてに納得できるものではなかった」と述べた。しかし、平昌五輪については「自分の力を出し切っ



中京大学スケート部部員と。後列左から2人目

た。満足感の方が大きかった」と振り返り、新しいシーズンについては「4回転サルコウを練習するとともに、今跳んでいるジャンプの質を高めていきたい」と抱負を語った。

最後に記者から「銀メダルを噛まなかったのはどうしてですか？」の質問に「なぜ噛む必要があるのですか？」と応じ、報道陣を笑わせ会見を終了した。

平昌五輪 中京大学 関係選手の結果

宇野昌磨

（スポーツ科学部2年）

フィギュアスケート個人 2位

フィギュアスケート団体 5位

堀島行真

（スポーツ科学部2年）

フリースタイルスキーモーグル 11位

須崎海羽

（中京大学附属中京高校）

木原龍一

（2014年度中京大学スポーツ科学部卒）

フィギュアスケート団体 5位

フィギュアスケートペア 予選敗退

湯浅直樹

（2017年度体育学研究科修了）

アルペンスキー回転 棄権

※学年・所属は2018年2月現在



田中恒成 復帰戦飾る

プロボクシング

田中恒成
フライ級に階級を上げての復帰戦
TKOで勝利、3階級制覇へ第1歩



Boxing

プロボクシング世界ボクシング機構(WBO)ミニマム級とライトフライ級の2階級でチャンピオンの座に就いた田中恒成選手(経済学部4年)は、階級をフライ級に上げてその初戦をTKO勝ちし、3階級制覇への第歩を踏み出した。

田中選手は昨年9月、WBOライトフライ級タイトルマッチでKO勝ちし、2度目の防衛に成功した。しかしその際、両眼を負傷し、計画していた他団体のチャンピオンとの統一戦が叶わなくなったため、ライトフライ級王座を返上した。

フライ級としての初戦は3月31日、名古屋国際会議場イベントホールで行われた。これまでの実績から田中選手はWBOフライ級1位にランクされており、相手は同級13位ロニー・バルドナド選手(フィリピン)。11戦10勝1分けの強打者だったが、田中選手は立ち上がりから得意の左ボディーブローを有効に決め、左右パンチの正確性でもバルドナド選手を寄せ付けなかった。

田中選手は試合前、「これまで練習してきたことを確実にやっつて勝利を取めた

い。先のことはそれからです」と慎重な口ぶりだった。しかし、試合開始後、左右から打ち込む大ぶりの相手のパンチをかわし、的確な小さいパンチで相手を圧倒した。4回には左ボディーブローで相手を倒しにまで追い込んだ。中盤も優勢に試合を運んだものの、結局、試合を決めたのは9回。連打で追い込んで相手の足を止めたところでレフェリーが間に割って入った。

試合後、田中選手はリング上から「皆さん、ただいま(帰ってきました)。ありがとうございます」とあいさつ。復活の手応えを感じたように見えた。ただ、タフネスを誇る相手に対し、KOまでに手間がかかったことで、試合の出来を「50点。勝ったのは良かったが、倒せるところで倒せない」と反省の弁を交えながら振り返った。

田中選手の戦績はこれで11戦11勝(7KO)。「できれば今年中に3階級制覇できればと思いますが、タイミンクもありません。いつも万全の状態に対応できるようにやっつけていきたいと考えています」。その表情には精神面での成長も感じられた。



2020年 東京を目指して 寺本明日香・大庭雅 卒業

(体操) (フィギュアスケート)
リオ五輪で日本女子体操チームの主将の寺本明日香、
フィギュアスケートでインカレ総合優勝に貢献した大庭雅が卒業
次のステージでの活躍を目指す

Graduation

名古屋市の日本ガイシホールで3月19日に行われた卒業式では学生、院生合わせて3085人が新たな旅立ちの途に就いたが、その中にはスポーツ競技の数々の大舞台で、「学術とスポーツの殿堂たる」中京大学の二翼を担った選手たちの姿もあった。

そして式の後、リオデジャネイロ五輪の日本女子体操チーム主将として活躍した寺本明日香選手（スポーツ科学部）と、スケート部（ミキハウス、レジックススポーツ）と、スケート部女子のインカレ総合優勝に大きな役割を果たしたフィギュアスケートの大庭雅選手（スポーツ科学部）と、東海東京（証券）が報道陣の取材に答えた。

寺本選手はリオ五輪個人総合で日本女子として52年ぶり入賞という快挙を成し遂げ、「やはりリオの個人総合入賞

が記憶に残っています。主将として年下の選手とともに団体で入賞できたのが嬉しかった。また、インカレ個人戦4連覇も忘れられない」と振り返った。

また、大庭選手は「インカレに毎年出られたのが大きな思い出。そして最後は優勝と、充実した4年間を過ごせた。授業も頑張り、単位もしっかりと取りました」と笑顔を見せた。

両選手は現在、愛知県を拠点に競技を続けており、寺本選手は「チーム戦が好きなので東京（五輪）でも主将として日本チームをまとめていきたい」、大庭選手は「これからは1年、1年頑張りたい。目標は年齢を重ねてもちゃんとできることを証明しているコストナー選手。会社がたくさん報告できるようになればいいですね」と抱負を語った。



期待の新生 吉永一貴・須崎海羽・山本草太

(ショートトラック) (フィギュアスケート) (フィギュアスケート)
平昌五輪に出場した吉永一貴、須崎海羽、
フィギュアスケート全日本選手権に出場した山本草太が入学
大学生活を通じてさらなる成長を目指す

New face

4月1日、名古屋市の日本ガイシホールで入学式が行われ、大学院生を含め、3008人の新しい仲間たちを迎え入れた。そしてこの中には明日の「中京大学スポーツ」を支える各競技の選手たちも顔をそろえていた。

このうち、式終了後にスポーツ科学部に入学したスケート部の3選手が新聞社、放送局の取材を受けた。

平昌五輪のショートトラック5000リレーの一員として7位入賞した吉永一貴選手（名経大市野）、平昌五輪フィギュア団体5位に入賞したベアの須崎海羽選手（中京大中京）、けがから復活してきたフィギュアの山本草太選手（愛み大瑞穂）で、入学式の看板前などでインタビューと写真撮影に応じた。

吉永選手は「スポーツ科学部では、自

分の競技につながることを勉強できるのが楽しみ。4年後の冬季五輪で活躍して、ショートトラック競技をもっともっと多くの人に知ってもらいたい」と早くも北京を見据えた。

須崎選手は「大学生になったのだから、いろんな面でできるだけ自分で決断して行動していきたいと思っています。フィギュアスケートでは、世界で活躍している選手たちに少しでも近づくことを目標にして頑張りたい」と意欲を見せた。

また、山本選手は「気持ち新たに、大学生として成長できたらと思う。大学生生活は少しずつ楽しんでいきたい」と話し、北京五輪については「目指さなきゃいけない舞台ですが、まだ口には出せません。もっともっと努力して上手になりたい」と前を見つめた。



青戸監督の かけっこ検定が授業に

長野県駒ヶ根市教育委員会が採用

長野県駒ヶ根市の市立東伊那小学校の運動場に子供たちの弾んだ声が響き渡っていた。周囲の山々は柔らかな新緑の彩りに包まれていてすっかり春を装っているが、その背後にそびえる木曾駒ヶ岳を中心とする中央アルプスは、まだ、白銀の光をはね返していた。そんな新年度を迎えたばかりの4月20日、小学校の授業で新たな取り組みがスタートした。

青戸慎司監督。2014年度から自らが監修した「かけっこ検定」をもとに、折に触れ、教職員や子供たちを指導してきた。そして5年目、公立小学校の授業に取り入れられることになった。全国的に子供たちの体力低下が問題視されるなか、文部科学省の新学期力テストの結果で、駒ヶ根市の子供たちの体力合計点が全国平均よりかなり低いことが判明したのがきっかけだった。特に50メートル走では小学校全学年の4分の3が全国平均を下回り、そこで子供たちが親しみやすい「かけっこ」に焦点を絞った対策が検討されて、かつての100メートル日本記録保持者でオリンピックでもある青戸監督に白羽の矢が立ったのだ。



「かけっこ検定」は、10級の「姿勢」に始まり、9級の「腕振り」、8級「早歩き」と進んでいく。そして「もも上げ」「スタート」、さらに「立ち幅跳び」「段差昇降」などと進み、最後は1級「50m走」検定に挑む。不定期ながらこの4年間の指導で、子供たちの走力も上昇の兆しを見せてきた。教育委員会の担当者も青戸監督も手ごたえを感じ、正式な授業の実現につながったのである。

授業初日の4月20日は、モデル校の東伊那小児童122人全員を対象に1・2年生、3・4年生、5・6年生の順に、それぞれ90分、授業を行った。

「かかとをつけて、つま先を開く」「腰はピンと立てている」「は姿勢について、「生卵を持つように手を握る」「ひじを90度（直角）にして前後に振る」は腕振りの説明だ。青戸監督は分かりやすく子供たちに語りかける。時には冗談を交え、気をそらさないように子供たちの心をつかんでいく。そしてこの日は全員の50メートル走のタイムを計った。11月頃を予定している最後の授業の日に再び全員が50メートル走を行う。「どれだけタイムが縮んでいるか」。約半年後の子供たちの成長が楽しみである。

Coaching

CHUKYO UNIVERSITY SPORTS

先輩 NOW

平井 一正さん
Kawajima Hironori

1971年度体育学部卒。岡山県出身。高校時代にウエイトリフティングと出会う。フェザー級（60kg級）で岡山県高校チャンピオンとなったが、インターハイは標準記録に達せず、出場できなかった。そこで「もう少しチャレンジしたい」と中京大学体育学部に進学し、卒業後、故郷に戻ったが、請われて73年に三重県立亀山高校常勤講師に。翌74年から教諭。76年のモントリオール五輪フェザー級銅メダリスト。モスクワ五輪の代表でもある。現在、名古屋産業大学教授。



バーベルを床に置く音が「タンタン」と響く。時に大きな音が混じり、見るからに重そうなバーベルが、置かれた反動で床をわずかに転がする。挙げていたのは女子。その選手がよく鍛えられているのは体型が示しているが、特に体が大きいわけでもないことがレベルの高さを物語っていた。

名古屋市北東部に隣接する愛知県尾張旭市。そのほぼ中心部に名古屋産業大学は位置し、平井さんは健康、スポーツ科学などを担当する教授を務めている。そしてクラブ活動ではウエイトリフティング部を指導している。

「東京（五輪）を狙える子もちらほらいますよ」。専用練習場で選手たちに目を配りながら、平井さんはそう言って笑顔を見せた。

高校時代、「楽しそうに見えた」ウエイトリフティングに出会った。中京大学でもバーベルと格闘したが、壁に突き当たり、卒業後は「競技をやめるつもり」で、岡山に戻って板前の修業をしていた。



前列右端が瀧正男さんの長男 克己さん、後列右から2番目 次男 健二さん

瀧正男さん 野球殿堂入り

長年にわたり中京商業高校、中京大学で
野球部部長・監督の指導者を務め、
アマチュア野球界の発展に尽くした功績により
野球殿堂入り

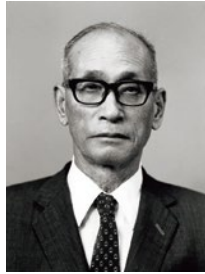
15日に甲子園球場で行われる予定。

日本野球の発展に貢献した人を顕彰する野球殿堂の2018年表彰者4人が1月15日に発表され、元体育学部教授で中京商業高校、中京大学監督を務めた瀧正男さん（1921〜2012年）が野球殿堂入りした。瀧さんはアマチュア野球の発展に尽力したことによる特別表彰で選出され、競技者表彰のエキスパート部門で原辰徳さん、プレーヤー部門で松井秀喜さん、金本知憲さんが選ばれた。

瀧さんは愛知県二宮市生まれ。中京商業学校時代に捕手として甲子園に5度出場、1937年夏に二員として優勝を経験、38年春には野口二郎投手とバッテリーを組み、主力として優勝に貢献した。名古屋高等商業学校（現・名古屋大学経済学部）を卒業後、戦地へ。マレーシアで捕虜生活を送り、47年に復員した。戦後は故郷の織維メーカーに勤務していたが、当時の梅村清明校長の誘いもあつて53年に母校中京商業高校の野球部長に就任した。同校では春夏合わせ、指導者として9度甲子園に出場し、2度の優勝を果たした。また、56年から中京大学硬式野球部の部長・監督として31年間にわたって指導者を務めた。この間、愛知大学野球リーグで11季連続を含む28度の優勝を果たし、70年には全日本大学野球

選手権を制覇して、関東、関西の大学以外では初の同選手権優勝校となった。さらに後進の育成にも力を注いだ。教え子は全国に及び、多くの甲子園出場監督を育てるなどアマチュア野球界の発展に尽くした。86年から92年まで愛知大学野球連盟副会長を務めた。

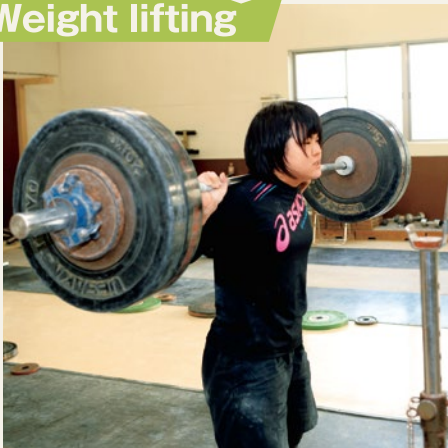
東京・文京区の公益財団法人野球殿堂博物館の野球殿堂ホールで行われた「平成30年野球殿堂入り通知式」には、瀧さんの長男で中京大学スポーツ科学部教授の瀧克己さん、次男で本学職員の水野健二さんが出席した。克己さんは「父は野球が大好きで、ほかには趣味のない人でした。この春の七回忌に嬉しい報告ができます」と、感激で時折言葉を詰まらせながらあいさつされた。



パロマ瑞穂野球場 瀧さんもここで指揮をとった

Legend

Weight lifting



そんなある日、中京大学の先輩で三重県ウエイトリフティング協会理事長の平岡二能さん（1962年度体育学部卒）から電話がかかってきた。「三重県に来てもう二度（ウエイトリフティングを）やらないか」。やや強引な勧めに心が動いた。故郷に戻った1972年秋に岡山県選手として鹿児島国体で2位に入賞した後、三重行きを決めた。73年に県立亀山高校の講師となり、翌74年4月に教諭に。中京大学時代には縁のなかった日本チャンピオンに73〜78年までの6年間に75年を除いて5度も輝いた。そして76年のモントリオール五輪では銅メダリストとして表彰台に上った。

「私は飽き性でね。趣味がないんですよ。そう苦笑するが、結局、高校生で出合った競技と今も付き合っている。それどころか、指導者としては「自分が取っていないメダルを選手たちに取らせてやりたい。東京（五輪）でそれがやれば「面白い」とますます力が入っているのだ。」

もちろん平井さんは教師としての目も光らせている。「学生は勉強がまず大事」「素直になれ」「天狗になるな」。そうして初めて良い競技者になれる。平井さんの持論だ。

*New Gymnasium***新体育館、完成!!**

中京大学豊田キャンパス
新体育館(3号館)が完成し、
4月から授業や
体育会クラブの練習などで
使用が始まった。

真新しい体育館は地上2階建て。1階のアリーナは床面積2471.6平方メートル、高さ12.5メートルで、大体育館(6号館)より広くなった。バスケットボールコート3面、バスケット2面とバドミントン3面、また、ハンドボールと新体操、チアリーディングの練習スペースなどとして、同時に使うことができる。冷暖房の設備も整えられており、授業やクラブ活動だけでなく、式典会場として利用することが可能である。1階のアリーナを臨む2階には約260席の観客席が設けられ、2階にはまた、2019年夏にスポーツ・ミュージアム



が開館する予定になっている。一方、アリーナ北側には、広場に面してスポーツテラスや多目的室が造られており、学生や選手たちが休憩やミーティングに利用している。

竣工式は3月6日、梅村清英総長・理事長、安村仁志・中京大学学長をはじめ学園関係者らが出席して行われ、正面玄関前で中京大学、設計、建設会社の代表者がテープカットで完成を祝った後、1階アリーナに移り、厳かに式典を執り行った。竣工式後の懇親会で、梅村総長・理事長は「2年後は東京五輪、この素晴らしい環境の下で素晴らしい選手が出て、授業その他でも実績を上げていければ」と期待を込めた。また、安村学長は「すべてのみなさんのチームワークで新たな夢の殿堂が完成した。床はモザイクのように組み合わせられてまさにチームワークの象徴、感動しました」と喜びを語った。

*Japan Football League***サッカー本山選手、新天地での活躍に期待**

附属中京高校サッカー部で活躍し、日本フットボールリーグ(JFL)所属のヴィアティン三重へ入団した本山遊大選手が新天地でのびのびとしたプレーを見せている。

本山選手は高校在学中、フオワードとしてチームを引っ張り、2017年度全国高校サッカー選手権大会には主将として出場した。ヴィアティン三重には2月に入団。記者会見で「高校では、考えてプレーすることを学びました。今後は、高い技術を身につけて、チームとともにJリーグに上がり、Jリーガーとして活躍したい」と抱負を語った。

JFLはJリーグと地域リーグの間に位置し、16チームが所属しており、ヴィアティン三重の昨年の成績は12位だった。今季は3月11日に開幕、13位(4月19日現在)につけている。11月まで総当たり2回戦の計30試合を戦う。

本山選手の背番号は19。「日本全国にこの番号を知りたい」と燃えている。ヴィアティン三重の海津英志監督は「持ち味である運動量と気迫をどんどん出して、ぜひチームをJリーグに上げてもらいたい」と期待を込めた。

{ Chukyo's COACH }

中京大学サッカー部

朝倉 吉彦 監督

Yoshihiko Asakura

コーチ、監督として、母校中京大学のサッカーに携わって13年目のシーズンに入った。男子サッカー部約200人の選手たちを束ねる。大所帯だけに部員同士の実力差にも当然、開きがある。個々の力に合わせ、東海学生リーグや大学選手権などに参加するトップチームから5、6のカテゴリーに分かれて活動をしている。プロ選手を目指す者もいれば、教員志望も。また、クラブ活動として学生生活を充実させるために、目標もそれぞれ千差万別だ。

それだけに選手たちにはまず、「授業は休まないようにやりなさい。真面目に」と強調する。「将来どんな方面に進むとしても何事にも一生懸命に取り組むことが一番大事ですからね。その上で部の方針として、「ボールを大事にする(道具としても)」「考えながら動く」「謙虚にプレーする」の三本柱を掲げる。

本格的にサッカーを始めたのは小学生の時。野球にも興味があったが、サッカーが学校の部活動にあったのがきっかけだった。「ポジショ

ンにこだわりはなかった」ので積極的にどこでもやった。足も左右同じように使える。「だからどのポジションの選手の気持ちもよくわかる」といい、部の方針もこれまでの自らの体験に根差している。

特に方針の二つ目「考えながら動く」について、「試合中は外から見ている監督よりも、中でやっている選手自身が(ゲーム展開を)判断する方がはるかに速い。パスや走りだけでなく、判断にもスピードが必要」という。試合中の監督の主な仕事は「戦術の指示をあれこれ出すのではなく、流れを見て選手交代で試合に変化を付けることだ」と考えている。

今年の目標は「結果を出して注目されるチームになること」ときっぱり。そこには「もっと中京大学サッカーをアピールしたい」との気持ちがある。ハイレベルの関東地区(の大学)に有力選手が流れがちな現状打破の必要性も感じている。「常に上位争いをするようなチームづくりをしたい」。全国大会常連校であることだけで満足せず、さらなる高みを見据えている。(国際教養学部3年 吉永翠)



朝倉吉彦監督(あさくら・よしひこ)愛知県出身。2003年度中京大学体育学部卒。愛知県立松蔭高校3年時にMFとして全国高校サッカー選手権に出場。中京大学サッカー部ではインカレ、総理大臣杯に出場し、インカレでは3年の時にベスト8に進出した。卒業後、県立三好高校で1年間常勤講師として勤務の後、現在も続けているジュニア・ユースクラブチームの監督に。2006年2月に中京大学サッカー部コーチ就任。2012年2月から監督を務めている。



学術とスポーツの真剣味の殿堂たれ

【中京大学スポーツ】



発行／中京大学
〒46618666
名古屋市昭和区八事本町10112

■ 広報部
TEL 052183517135
■ スポーツ振興部
TEL 056514616935